

マルコによる福音書 14 章 1-9 節 「良いことのために」

1節には、「イエスをとらえて殺そうと考えていた」とあります。祭司長や律法学者たちは、イエスを捕らえて殺すのは、「祭の間はやめておこう」と考えていました。しかし、実際は、彼らの企み通りにことは運びません。イエスさまはこの祭の最中に、大勢の群衆が見つめる中、十字架につけられたのです。

皆さんは、「KY」という言葉を聞いたことがありますか。「空気が読めない」という言い方の頭文字をとった略語です。今日の聖書箇所では、ある出来事をきっかけに2つの空気が対峙することになりました。先ほどの様に、祭司長たちがイエスさまを殺す計画をしていた時。そして、重い皮膚病を負ったシモンという人の家で起こった出来事です。この家で、イエスさまが食事をされようとしたとき、一人の女性が「純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた」(3節)というのです。すると、そこに居合わせた人たちが怒りをあらわにしました。人々が憤慨したのは、女性の行為ではなく、むしろイエスさまに注がれた香油についてでした。大多数の人がこっちの意見が正しいという空気に対して、イエスさまの空気は違っていたのです。

6節「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ」。ここで、イエスさまは、この女の行為をはっきりと「良いこと」と仰っています。この奉仕を受け入れて下さるのです。ただ、主イエスに仕えたいという思いからなされた奉仕であれば、どのようなものでも、主は「良いこと」と仰って下さることが見つめられているのです。また、7節では、これからことを私たちに伝えてくださっています。主なる神さまは、つねに私たちと共におられます。逆に、私たちはいつも神さまと共にあるか、つねに神の御心を受けとめているのかと言えば、残念ながら必ずしもそうではないだろうと思います。私たちは神の御心よりも、この世の常識や価値観を優先させてしまうことがあります。イエスさまは、貧しい人たちへの配慮や分かち合いを否定されているわけではありません。主の十字架を見ずして、この世の様々な課題や問題を、自分の思いや考えのみによって解決していこうとするとき、人間の心は本当に大切なものを見失ってしまうのではないのでしょうか。

教会には、信仰に基づいた奉仕があります。それは、社会常識やこの世の価値観のみにもとづくものではありません。ゆえに私たちは、教会は、ときに社会の空気と対峙せざるを得ないことがあるかもしれません。しかし大切なのは、御言葉を通して神の御声に謙虚に耳を傾け、神の御心の実現のために共に祈りを合わせていくことであり、神と人に仕える者として皆で協力して教会内外における奉仕を担っていくことです。空気を読まなかった女性の行為は、けっして無駄ではなく、「良いこと」でした。それは、受難と十字架の道を進んで行かれる主イエスこそ救い主であるという信仰の告白であり、このお方にすべてをゆだねて生きるという全き信頼でした。注目すべきは、この人が、「できるかぎりのことをした」と8節で言われていることです。イエスさまの空気を全身で受けとめながら、良いことを「できるかぎり」行った女性の奉仕を、あらためて今、御言葉の中に思い起こしてみたいと思います。できるかぎりのことを、良いことを私たちは行いながら、主イエスの最後の1週間、十字架の意味を考えながら過ごしたいと願います。